

研究概要

府中町立府中中学校 教諭 木佐木 太郎

1 研究主題

自己有用感を育む生徒指導の在り方

— 保健体育科における仲間とのコミュニケーションを豊かにする学習を通して —

2 主題設定の理由

本校は、平成21年度から「広島県中学校学力向上研究推進校」、平成23年度は不登校対策実践指定校及び心の元気を育てる地域支援事業の県指定事業を受け、学力向上及び問題行動及び不登校の克服に向けた様々な取組を進めた。その結果、表1、2のように学力の向上、生徒指導上の諸問題の減少等の成果を得ることができた。

しかし、表2に示すように暴力行為が依然として発生するとともに、表3に示すように不登校生徒の割合については、全国及び県の平均を大きく上回っている。

また、本校の暴力行為や不登校の要因の多くは、「人との関わり」の中から発生している。

本研究においては、「人と関わり」を通して育まれる自己有用感に着目し、教科指導（保健体育科ダンス分野）を通して、生徒に自己有用感を育み、暴力行為や不登校を減少させることを追究することとした。

表1 平成23年度「基礎・基本」定着状況調査における教科の調査

| | 広島県の平均通過率 | 所属校の平均通過率 |
|----|-----------|-----------|
| 国語 | 73.2% | 77.6% |
| 数学 | 74.7% | 80.3% |

表2 所属校における生徒指導上の諸問題の件数

| | 生徒指導上の諸問題の件数 |
|--------|--------------|
| 平成22年度 | 89件（17件） |
| 平成23年度 | 51件（2件） |

※（ ）内は暴力行為の件数

表3 中学校の不登校生徒の割合

| | 全国 | 広島県 | 所属校 |
|--------|-------|-------|-------|
| 平成21年度 | 2.77% | 2.89% | 5.00% |
| 平成22年度 | 2.73% | 2.85% | 4.50% |
| 平成23年度 | — | 2.74% | 4.76% |

※平成23年度「全国」は未公表（平成24年8月末現在）

3 研究仮説

保健体育科のダンス領域の学習指導に、3点の学習活動を意図的・計画的に設定・展開すれば、生徒に自己有用感を育むことができるであろう。

4 研究内容

(1) 教科指導（保健体育科ダンス分野）における異年齢交流学習の実施

① 研究授業の内容

- 期間 平成24年6月13日～平成24年7月9日
- 対象 第1学年（6学級208人）
第2学年（6学級215人）
- 単元名 ダンス（現代的なリズムのダンス）
- 時間数 第1学年5時間
第2学年7時間

② 学習指導の工夫

自己有用感を育むための工夫として、次の3点の学習活動を意図的・計画的に設定・展開する。

ア 集団の一員としての役割を果たすことができた誇りや自信を獲得できる学習活動

- 異学年交流グループ内で第2学年が第1学年へ知識や技能を教える学習活動（第2学年へは貢献感、第1学年へは他者からの受容感を育む学習活動）
- 同学年交流グループ内で技能習得が困難な仲間へ支援・援助する学習活動（教える側へは貢献感、教えられる側へは他者からの受容感を育む学習活動）

イ 自分の力で最後までやりとげた成就感を獲得できる学習活動（自己受容感を育む学習活動）

- 自分の力でダンスを創作する学習活動
- 自分の創作したダンスを発表する学習活動

ウ 互いを認め合い心の安定を獲得できる学習活動（他者からの受容感を育む学習活動）

- 互いに交流（学び合い）する中で、失敗体験を重視し仲間の努力を認めほめ励ます学習活動
- 仲間のよい動きや表現をまとめ指摘し合う学習活動

(3) 自己有用感を測るアンケートの作成、実施、分析（t検定）

本研究における自己有用感の定義を基に、自己有用感は貢献感、他者からの受容感、自己受容の三要素で構成されるものと考え、全15項目、三つのカテゴリー（貢献感、他者からの受容感、自己受容）からなるアンケート（質問紙）を作成した。その後、質問項目の妥当性を検討するため、主因子法による因子分析を行った結果、表6に示す二つの因子を抽出することができた。因子1を「貢献感・他者からの受容感」、因子2を「自己受容感」とした。

5 実践

- ① 第2学年における同学年交流学习（2時間）
第1学年及び第2学年における異学年交流学习の前に、第2学年の生徒同士が交流し、事前に技能等を習得する学習活動を実施した。
- ② 第1学年及び第2学年における異学年交流学习（2時間）
第2学年が事前に習得した技能を第1学年に教える異学年交流学习を実施した。
- ③ 第1学年及び第2学年における同学年交流学习（2時間）
同学年同士の交流を通して、習得した技能をより高める学習活動を実施した。
- ④ 第1学年及び第2学年における異学年交流学习（2時間）
個人及びグループにおけるダンスの創作活動及び異年齢交流学习内のダンス発表会を実施した。



6 研究結果

<第2学年>

図1に示すように、2因子の評定平均値については、いずれも有意な高まりが見られた。

貢献感・他者からの受容感については、図2に示すように、全ての質問項目について、評定平均値が上昇し、特に問1、問4、問8、問10、問13については有意な高まりが見られた。

自己受容感については、図3に示すように、全ての質問項目に対する評定平均値が上昇し、特に、問9、問14、問15については、有意な高まりが見られた。

<第1学年>

図4に示すように、2因子の評定平均値については、いずれも有意差は見られなかった。

貢献感・他者からの受容感については、図5に示すように、全ての質問項目の評定平均値について有意差は見られなかった。

自己受容感については、図6に示すように、問14は有意な高まりが見られたが、その他の質問項目について有意差は見られなかった。

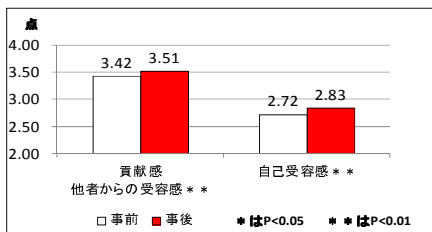


図1 第2学年の因子別の評定平均値

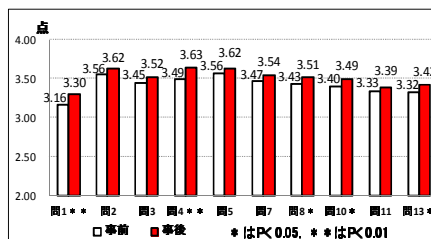


図2 第2学年 貢献感・他者からの受容感の質問項目別

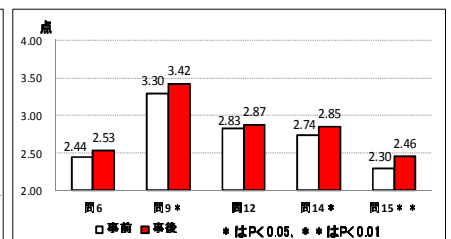


図3 第2学年 自己受容感の質問項目別評定平均値

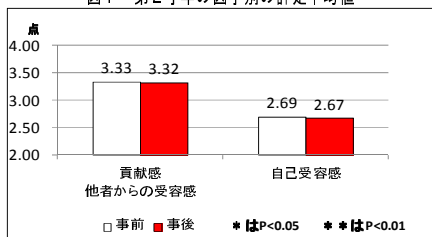


図4 第1学年の因子別の評定平均値

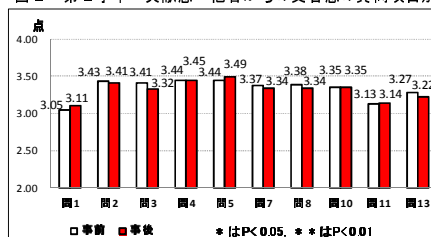


図5 第1学年 貢献感・他者からの受容感の質問項目別評定平均値

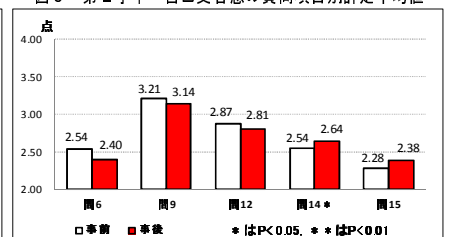


図6 第1学年 自己受容感の質問項目別評定平均値

7 成果と課題

(1) 成果

- 保健体育科のダンス領域の指導に、3点の学習活動を意図的・計画的に設定・展開すれば、第2学年の生徒に自己有用感を育むことができることが分かった。
- 異学年交流グループ内で、第2学年が第1学年へ知識や技能を教える活動は、生徒にダンスのねらいを達成させることに効果的であると分かった。

(2) 課題

- 本研究においては、第1学年の生徒に自己有用感を育むことができなかった。より多くの同学年交流学习や効果的な学習時間の設定について、改善を図る必要がある。